

GENERAL PAUSE

毎日、ニュースや新聞で「今日も暑い。」とか「今日は昨日よりもさらに暑い。」という言葉を目にするたび、「そりゃ夏だから暑いのはわかってるよ。」と思います。夏なので暑いのはわかっていますが、暑いのは嫌です。

さて、お待たせしました。7月号です。

2017年8月の練習予定

*8月のレギュラーの練習予定です。

練習日	時間	曲目
3日	19:30~21:00	小組曲 全楽章
10日	19:30~21:00	小組曲 2楽章ずつ練習
17日	19:30~21:00	小組曲 2楽章ずつ練習
24日	19:30~21:00	小組曲 2楽章ずつ練習
31日	19:30~21:00	小組曲 2楽章ずつ練習

・河毛先生 練習日

9/14、10/5、10/19、11/2、11/9 の5日です。

練習回数に限りがあります。しっかりと準備をして練習にのぞんでください。

連載～4回目～

その4.シラブル

教則本などでシラブルという言葉が出てきますが、4年前の私には全く意味が理解できませんでした。レッスンに付いた当初自分の弱点としてリップスラーやリップトリルが出来ないと、ダブルタンギングを長く続けられないということが悩みである旨先生に話したところ、口の中の舌の位置をどこに置いているか聞かれました。私は上の歯と下の歯の間に浮いている状態だと答えると、それは全くの間違いだと言われました。私の舌の使い方が根本的に間違っていたのです。先生の舌の使い方(シラブル)の指導は以下のようなものでした。

- ・舌の先は下の歯の内側にくっつくようにセットしなさい。
- ・タンギングもその状態でやりなさい。
- ・ダブルタンギングのkは、その状態で出来るだけ舌の先の方でやりなさい。(私はかなり奥の方でやっていました)

2017年の演奏会の予定

(決定分)

・音の祭典 in YAWATA

2017.11.12 (日)

「小組曲 全楽章」

作曲：ALFRED REED

・音の高低は唇の隙間の広さ（アパチュア）をできるだけ変えずに、舌の腹を上げ下げして変えるようにしなさい。（これがよく分からなかったのですが、口笛を吹くときの舌の使い方と同じだと教えられて初めて合点がいきました。）

シラブルは比較的容易に習得出来ますよという先生の言葉に励まされ、これを集中的に練習した結果、劇的にテクニックが上達しました。今では早いリップスラーか遅いリップトリルという感じのところまで出来るようになりました。

しかしなんといっても、シラブルを習得することにより、音をはずすことが減り、音程も安定し、高音域が楽に出せるようになりました。また跳躍も楽に出来るようになりました。

(寄稿：Trp 小田川さん)

小組曲について

書庫を整理していたら、ALFRED REED作品集（リード指揮、東京佼成WO演奏で録音）の音源集ができました。もちろん、小組曲も収録されていました。楽曲解説を簡単に紹介します。

小組曲は、4つの楽曲から構成されており、いずれも18世紀に流行った舞踏組曲や舞曲の名前がつけられています。

第1楽章・・・イントラーダ

4/4拍子のファンファーレと行進曲の形式で、宮廷にゲストが入場してくる情景を描写している。宮中でのFestivalが始まる序曲で、tuttiの多い行進曲。

第2楽章・・・シチリアーナ

シチリアーナは6/8拍子のイタリアの舞曲。木管やホルンが主体となって曲が進み、オーボエの美しいソロが聴かせどころ。

第3楽章・・・スケルツォ

18世紀に作曲されたシンフォニーは、第3楽章に3/4拍子のメヌエットという優雅な舞曲が用いられました。しかし、ベートーヴェンは少し軽快な3拍子のスケルツォを用いたそうです。この3楽章はそれに習ってスケルツォとなっていますが、3/4拍子ではなく、2/4拍子で書かれています。木管楽器を中心に3部構成で書かれており、trioではミュートトランペットが軽快な旋律を奏でます。

第4楽章・・・ジーク

ジークは17世紀から18世紀にかけて、組曲の終曲に用いられた舞曲の1つで、6/8拍子でイタリア、フランス、イギリスなどで流行した舞曲です。軽快で流れるような、かつ浮きたつような楽しさを持つ曲で、終楽章にふさわしい華やかさを持っています。

来月はどんな話題が登場するやら・・・。それでは、来月号をお楽しみに。